
めだかボックス～何でも知ってた少年～

勦b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めだかボックス〜何でも知ってた少年〜

【Nコード】

N0147X

【作者名】

勸b

【あらすじ】

『青春に平等なんかありえない』

彼——羽川駿河は『何でも知っていた』

かつてはこの世界全てのことを『何でも知ってた』

今は、自分が興味のあることならば『気が付いたら何でも知っていた』

———そんな彼の物語

———憐れな彼の物語

プロローグ（第0箱）（前書き）

『』があるのに『』が無いセリフがあるのは仕様です

次の『』が出るまでそのキャラが話していることになります

もしも、この書き方に違和感を覚えたりしたら教えてください（こういう風に書いたらいいよ、等の意見を教えてくださいましたら嬉しいです！！）

誤字脱字等教えてくれたら嬉しいです！！

プロローグ 第0箱

夢を見る

——彼女の夢を

誰も居ない教室に俺が座っており机には彼女が座っている

「明日からは彼女が生徒会長になるんだっけ」

彼女は楽しそうに言う

「僕としては、彼女と君が組むのは楽しくないんだけどね」

独り言のように

「まあ、君に限って無いと思うけど、浮気はしないでくれよ。君の彼女は僕だけで十分だ」

そんな彼女に言い返す

「……今は違いますよ、俺とあなたは他人だ」

俺が言うと、彼女は悲しそうな顔をする

「酷いこと言わないでくれよ。傷つくじゃないか」

「……知りませんよ」

俺が俯きながら呟くように言うと、彼女は俺の頭を撫でる

「忘れないでくれよ、僕が愛してるのは君だけだ」

彼女——安心院なじみは俺に優しく言う

——優しい嘘を俺に言う

——

そんな彼女の嘘を聞いて、俺は目覚める

……今日もやな夢を見た

そんなことを思いながら、制服に着替える

——今日から彼女が生徒会長になるんだっけ

思いだすだけで学校に行きたくなる

俺が所属している13組では、登校義務が無いため本来なら行かなくてもいいのだが、行ったほうが面白いことを『知っていた』俺としては行くしかない

俺は大人しく学校に向かった

――――

放課後、俺はおとなしく帰路につく

――が

「何処に行く気だ、駿河」

教室から出てすぐに声を掛けられる

このクラスには駿河という名前の人（というか、クラスには殆どの人が居ないが）は俺しか居ない

俺は声を掛けてきた人を見る

そこには、指定された制服とは違う服装をした彼女――黒神めだかがいた

「……先輩にため口なのはよく無いと思うなあ」

「『私と貴様の関係』には礼儀なんて必要無いだろ」

当たり前のようにめだちゃんは言うど、俺の手を取る

「……俺とめだかちゃんの関係って何？」

俺の手を取りながら歩きだす彼女に合わせながら俺は聞く

「決まっているだろう」

そう言うと、彼女は足を止めて俺の方を見る

「かつての宿敵だ!!」

……かつての宿敵には礼儀なんて必要無いのか？

「そして、昨日の敵は今日の友つまり、私と貴様は友達だ」

……めっちゃくちゃだ

彼女は真顔で俺に言う

恐らくだが、本気で言ってるんだろう

「現に、貴様は『この学校では私の仲間』だからな」

……そう

彼女の言葉を借りるなら、かつての宿敵である彼女だが、この学校では俺は彼女の仲間だ

——でも

「それは、時間限定だけどね」

時間限定とはいえ、めだかちゃんの仲間になるのは嫌だ……

彼が生徒会長を続けてればよかったのに

「……わかってるさ

「だが、私は嬉しいのだ

「貴様が私の——時間限定でも

「私の仲間でいてくれるのに

「——私は嬉しい!!」

彼女は俺の目を見ながら言う

——光が無い虚ろな瞳で俺の目を見ながら

「……そう」

俺がため息混じりに返事をする、彼女は満足そうな笑みを浮かべて前を向き、歩きだす

先程とは違い、その瞳も戻っている

そんな彼女に聞く

「今から生徒会室に行くの？」

「ああ、やることは沢山あるからな」

「先ずはさ、メンバー集めからやりなよ」

彼女は歩きながら首を傾げる

「メンバー？私と貴様で充分じゃないか」

「……俺は生徒会じゃないから」

「似たようなものだろ、なんだったら、生徒会に入ってもいいぞ、むしろ入れ」

「全然違うから、俺はあくまでも生徒会の手伝いをするだけだし、それに入らない」

俺が足を止めるとめだかちゃんも止まる

「俺は生徒会室に先に行つとくからさ、めだかちゃんは彼を連れてきてよ」

「彼……善吉のことか？」

「そうだよ、彼だったらさ、何だかんだ言いながらもめだかちゃんに付いてきてくれるはずだし」

「……善吉が私に付いてきてくれることを『知ってた』のか？」

「まさか、今の俺は『自分が興味あることしか知ってないよ』、俺

は彼には興味無いからさ、彼の事は何も知らない」

俺が苦笑いを浮かべながら言うと、めだかちゃんは俺の手を離す

「……知ってなくていいさ、貴様は何も」

それだけ言うと、彼女は俺に背を向けて歩きだす

——俺の能力もずいぶんと可愛くなったな

俺は生徒会室に向かって歩きだす

——口元にのみ薄らと笑みを浮かべながら

ブログ〳第0箱〳（後書き）

こんにちはー勦bでーす

普段はヤンデレ書いてます

いやー予告編を短編で書いて投稿したら、私の予想以上に見てみた
いという意見がありましたので投稿しました

めだかボックスは全巻持ってますので、書くのは楽ですね

先程言いましたが、この作品の予告風短編を投稿しますので、興
味がある方は見てくれたら嬉しいですよー！！

PSルビのやり方がわかりません

……説明見ながらやってるのになー

感想くれたら嬉しいですよー！！
他の作品もよろしく願いますー！！

ブログ〳第1箱〳(前書き)

総合評価100達成!!

評価してくれた方ありがとうございます!!
今回も短めです

プロローグ 第1箱

——暇だな。

めだかちゃんと別れて先に生徒会室に来たのはいいがやることが無い。

……暇すぎる。

適当に置いてあった椅子に座りながら彼女が来るのを待っていると扉が開く。

「待たせたな、駿河」

「待ちくたびれたよ」

めだかちゃんに続くように彼も入ってくる。

「っ!! あんたは!!」

彼——人吉善吉は俺を指差して言う。

「羽川駿河!!」

「1年ぶりだね、善吉君」

睨んでくる善吉君に笑顔で返事をする。

「何であんたが生徒会室に居るんだ!？」

「何を言ってるのだ善吉、駿河は生徒会役員だから当然ではないか」

「違うから!俺は生徒会補佐であって生徒会役員じゃないから!！」

「生徒会補佐？」

善吉君が首を傾げながら言う。

「生徒会を手助けする人のことだよ、前の生徒会長の仕事を手伝いたかったから去年俺が作ったんだ」

「……てことは、あんたがここにいる理由は——」

「めだかちゃんの仕事を手伝うためだよ」

めだかちゃんは会長・副会長・書記・会計・庶務の5つの役職全部1人でやっている。

俺としてはずっとそれでいいと思うけど、『あいつ』が関わってくる以上そんなこと言えない。

『あいつ』がこの学校に来るまでには――

「どうしたのだ駿河難しい顔をして」

「……何でもないよ」

黙っていた俺を心配するようにめだかちゃんは言った。

既に善吉君は席に座っていた……俺のことをまだ睨んでるよ。

「……まったく、俺を連れてきた理由をそろそろ教えてくれよ、生徒会長さん」

善吉君は首を押さえながら言う。

……首を捕まれてたのかな？

「駿河がメンバーを集めろと言うからな、先ずは貴様をと思ってな」

「そんなの羽川先輩にでも入ってもらえばいいだろ、何で俺なんだよ、生徒会長さん」

「よそよそしい呼び方をするものではないぞ、昔のようにめだかちやんと呼ぶがよい！」

凜とした態度でめだかちやんは言う。

「頼むよ善吉君、それに――」

俺が言うと善吉君は睨むように見てくる。

「俺とめだかちやんと一緒に居させていいの？」

「っ！！」

めだかちゃん大好きな善吉君からすればそれだけは避けたいことだろうことを言う。

「それに、めだかちゃんには善吉君が必要なんだ、仕事とかそんなんじゃないってただ善吉君がそばにいてほしいだけなんだからさ」

「!!」

善吉君はそれを聞くと顔を赤くしながらめだかちゃんを見る。

「いや、私はする——」

「ほら!めだかちゃんもそい言ってる!!」

めだかちゃんが言い終わる前に被せて言うと、善吉君は更に顔を赤くする。

「そういえば、めだかちゃん目安箱には何か無かったの!？」

これ以上この話を続かないように話をそらすとめだかちゃんから意外な返事が返ってくる。

「うむ、先ほど開いてみたところ早速第一号の投書があった」

「目安箱？……あーあったなそんなかったるい」

善吉君はめだかちゃんから目を逸らしながら言う。

めだかちゃんが紙を取り出すと読み始める。

「三年の不良達が剣道場を溜まり場にしていて困っていますどうか彼らを追い出してください——だそうだ」

「はじめにしてはいきなり重いね」

率直な感想を俺は言うと、立ち上がる。

俺に続くように善吉君も立ち上がると言う。

「……結局巻き込まれるのかよ」

「不満か？」

めだちゃんが言うのと善吉君はめんどくさそうに言う。

「今回が最後だからな！」

……素直じゃないねえ。

そんなことを思いながら、俺達は剣道場に向かった。

プロローグ〈第1箱〉（後書き）

こんにちはー勲bでーす

……全然話が進まない

しかも、今回はヤンデレ要素無しだし

……駄目駄目だな、おい

次回でプロローグは終わると思います。

PS 総合評価100達成!!

評価してくれた方ありがとうございます!!

ブログ〜第2箱〜（前書き）

総合評価240達成！

PV13000達成！

やっとブログが終わった……

それでは、善吉君涙目な最後のブログをどうぞWWW

プロローグ 第2箱

ここ、『箱庭学園』にはありとあらゆるスポーツ施設が完備されている。

その中でも剣道場は伝統ある建造物として大切にされている――

俺が箱庭学園に入学する前に、夢の中で『彼女』がそう誇らしげに語っていたのを思い出しながら剣道場の門を彼女が開ける。

――その中には柄の悪い人がこちらを睨みながら座っていた。

おおー、怖い怖い。

『彼女』曰くそれは数年前までの話であり、剣道部が廃部になったあとは不良（笑）のアジトになっているとも聞いた。

「あ？誰だアお前ら」

真ん中にいたリーダーっぽいのが言う。

「生徒会だよ」

「目安箱への投書に基づき生徒会を執行する！」

俺が言いめだかちゃんが付加えたとリーダーっぽいのが近くにあった木刀を取り立ち上がるとそれをめだかちゃんに向ける。

「生徒会がこんなところにおいでになるとは驚きだな！支持率98%だが何だか――」

「長い」

俺がリーダーっぽいのに言うと同時にリーダーっぽいのが持っていた木刀が床に叩きつけられる。

「なっ!？」

「駿河!!」

めだかちゃんがリーダーっぽいの中から目線を外し俺を見る。

「良いだろ、こういう奴らは潰した方が早い」

「だが……!」

「傷つかせないようにするから問題ないよ」

それだけ言って俺は前に出る。するとリーダーっぽいのが言う。

「っ! 舐めやがって!! 囲めおめーら」

そういうと不良達が俺達を囲む。

「制服改造に染髪、装飾校則違反のオンパレードじゃねえかよ」

「君がいる生徒会は人のこと言えないだろ」

「俺は生徒会じゃねえ!!」

「奇遇だね、俺もだよ」

善吉君と話ながら俺は右手を上げる。

「まあ、俺は君が生徒会に入るかどうかは『知ってない』けどさ」
そういつて右手を下ろす。

すると、不良達は皆地面に倒れる。

「あんたらの配置は『知ってたよ』」
俺が言うためだかちゃんが口を開く。

「……駿河」

後ろから俺の名前を呼ぶめだかちゃん。

「怪我はしてないはずだよ。加減もしてるし、相手の服を狙ったから」

それだけ言う俺はめだかちゃんの手を取る。

「「ッ!」」

めだかちゃんは顔を赤くして善吉君は俺を睨む。

「どうせ今から彼等に稽古を付けるんだろ?更衣室で着替えてきてよ」

「何故だ?」

「……めだかちゃんもって恥じらいという概念を持とうよ」

本来なら生徒会で着替えるはずだったのだが俺が急かしたせいでめだかちゃんはまだ制服だ。

露出癖があるめだかちゃんのことだしほっといたらここで着替えだしそうだ。

そのため、俺はめだかちゃんを更衣室に連れていこうとするのだが――

「……成る程、貴様の考えがわかったぞ」

めだかちゃんは顔を赤くしながら嬉しそうな笑みを浮かべる。

「だが、私と貴様はまだ学生だ

「いや、貴様がよければ私は構わないが――」

「私にも心の準備が――」

「そんな準備はいらないから!!」

馬鹿なことを言うめだかちゃんを更衣室に投げ入れると俺はそのまま善吉君に近づく。

「後のことは頼むよ、俺は書類でも片付けとくからさ」

「わーたよ、めだかちゃんには俺から言っとく」

「へー」

「……何だよ」

俺はからかうように善吉君に言う。

「本人が居ないときにはちゃんと『めだかちゃん』って読んでるんだ」

「っ!？」

善吉君はそれを聞くと恥ずかしそうに顔を赤くする。

「まあ、別にいいけどさ 「今度はめだかちゃんのまえで言うといいよ」

「カツ!そんなのごめんだ!!」

強がりと言う善吉君にこの場を任せて俺は生徒会室に向かった。

翌日、俺が生徒会室に向かう途中に彼にあった。

「やあ、善吉君寝心地はどう？」

善吉君は後頭部から血を流しながら地面に俯せで倒れていた。

「善吉君はついてるよ」

俺は動かない彼に言う。

「今の俺は生徒会補佐だ、そんな俺に『たまたま』見つけられたんだ」

俺は動かない彼の手を取り自分の肩に乗せる。

「まあ、今は生徒会役員じゃないけどさ生徒会補佐は困った生徒を助けるのも仕事なんだ」

俺は保健室に歩きだすと善吉君が口を開く。

「……知ってたのか」

「『知らなかった』善吉君に合ったのは本当に偶然だよ
「まあ、善吉君が怪我することは『知ってた』けどね」

俺が言うのと彼はぶっきらぼうに言う。

「……そうかよ」

そんな彼と共に保健室に向かった。

善吉君を保健室のベッドに寝かせたあと俺は剣道場に向かった。

剣道場にはぼろぼろになったリーダーっぽいのが目の前の男に竹刀を向けていた。

「勝手なこと吠えてんじゃねえよ

「たった今思い出したは 「俺は昔剣道少年だったんだよ！

！」

リーダーっぽいのが言うのと周りにいたぼろぼろの不良達も次々にそれに賛同しだす。

それを聞いた男はぶつぶつ何か言うのと木刀を振り上げる。

「剣道三倍段って知ってっか！？」

「僕はあんたらの3倍強いって意味だ！！」

「おおーそれは怖い怖い」

俺が言うのと振り下ろそうとした木刀の動きが止まる。

「！？」

「どうしたの？早く振り下ろしなよ、3倍強い後輩」

俺が言うのと彼は首だけ動かして此方を向く。

「お前は！？」

……全く無知な後輩だな

俺はそんな後輩に優しく教える。

「生徒会補佐だ！」

それだけ言って彼に右手の平を向ける。

「生徒会補佐？」

「生徒会の関係者かよ

「だったらスッこんでろよ！」

「学園施設を不当に占拠してる雑草どもをむしってやってんだ
「僕は正しいだろうがああん！？」」

彼は叫ぶ。

——無意味な正義を

——自分勝手に

「知るかよ

「俺はお前が正しかろうがなかろうがどうでもいいんだ

「どれもしよせん『彼女』から見たら『くだらないこと』なんだ
「——だから」

俺は右手の平を握る。

「どうでもいい」

握ると同時に彼は倒れる。

「かつ!？」

彼の服は所どころ切れ、身動きをとろうにも指一本動かないだろう。

「まあ、これは今回のぶん」

それだけ言って俺は彼に近づいて足を向ける。

「ここからは、生徒会補佐じゃなくて、可愛い後輩を虐めた分だ」

俺は彼の顔を思いっきり蹴る

——心にも無いことを言いながら。

side out

彼、日向は自分の顔を押さえながら校内を歩いていた。

「畜生!」

日向には駿河の靴のあとがくつきりと残っており、それを見られたくないため人気が無い道を通りながら家へ帰ろうとしてるのだ。

「絶対にこのままじゃ済まさねえ！」

「先輩だろうがいつかギッタンギッタンにしてやるぜ!!」

「ん？先輩？」

日向は声がした方を向く。

そこには首を傾げたためだかがいた。

「せっ生徒会長!？」

日向はめだかとめが合うと腰を抜かす。

「貴様は今、先輩と言ったな」

めだかは日向に近づく。

「そっそれがなんだよ!!」

「先輩……か」

めだかは扇子で口元を隠す。

だが、口元を隠されていてもわかるくらいめだかは嬉しそうに笑っていた。

「ふむ、駿河はやはり私の仲間だな」

「私が不在しているなか剣道部のピンチを救うとは——」

「やはり駿河は生徒会に必要なだな」

「いや——」

「『私』に必要……か」

光が無い虚ろな瞳で上を見ながら独り言のようにめだかは言う
とゆつくり日向に視線を向ける。

「さて、そんな駿河をギツタンギツタンにされないように
「そして、二度と悪巧みなどできないよう
「この私が徹底的に可愛がってやる!!」

楽しそうに笑いながら日向を睨むめだか。

——その日、学園では日向の悲鳴が止まなかったという。

「早速面白いことに巻き込まれたじゃないか」

彼女——安心院^{あんしんいん}さんは机に座りながら俺に言う。

「つか『巻き込まれるようにした』が正解かな駿河はこのこと
を『知ってた』んだから」

「めだかちゃんと居るのは面白いですから」

俯きながら俺は言う。

俺とは対照的に安心院さんは上を向きながら言う。

「かつて宿敵だったのが次の章では仲間になる

「うん、まるで少年ジャンプみたいな王道じゃないか」

「そうですね」

安心院さんは冷たく返す俺の頭を優しく撫でる。

「駿河は何時になったら僕に笑顔を見せてくれるのかな

「駿河の笑顔を見るのは僕だけで充分だ

「それ以外は見る価値もない」

安心院さんのそんな言葉を聞きながら俺は目を覚めました。

———今日も最悪な夢を見た

———最悪な夢は明日も見erだろう

———何時も道理の最悪な夢を

ブログ第2箱（後書き）

こんにちはー勦bでーす

善吉君涙目www

せっかくですしオリ主を活躍させたらこれだよー！

善吉は私的には好きなキャラなのに……

次からは出番増やします（たぶん

さて、オリ主の紹介はもう少し後にしようかと思っています。

風紀委員登場ぐらいに書きたいです。

総合評価200達成を記念しての番外編なども書きたいですね。

番外編はおそらくは過去話になると思いますけどね……

PS次回投稿は少し遅れる予定です

学園編〜第3箱〜（前書き）

総合評価370達成！！

原作2話を書こうとしたらオリジナルの話になっていて書いていた自分でもビックリしました（おい

学園編 第3箱

ここ、箱庭学園の部活動は伝統的にレギュラー争いが激しい。

故に、レギュラーに選ばれたメンバーは虐めに近いものに合うことが多い。

――特に、レギュラーに選ばれなかった先輩が後輩を虐めることも

――
陸上部のロッカーにて1人の女性が周りを見渡していた。

彼女は周りに人がいないことを確認すると作業に移る。

その作業を終え、一通の手紙をロッカーに入れようとする。

――
が

「何してるの？」

「っ!？」

そんな彼女に話し掛ける男が現れる。

「べ、別に何も――」

「隠そうとしても無駄だよ、君がやってたところ見てたし」

彼女はそれを聞いて驚いた表情をする。

「周りは確認したはず――」

「へー、そうなんだ」

男は興味なさそうに言うと、彼女に近づく。

彼女は涙目で顔を青くしながら男を見る。

「君は運がいい」

男は言いながら彼女に近づく。

「今の俺は君に味方したい気分なんだ

「だから、君にはこれをプレゼントしてあげよう

「とっておきのプレゼントだ」

男は軽く笑いながら一通の手紙を渡す。

「それを代わりに入れておくといい」

男は先程彼女が入れた手紙を取り出すと彼女に背を向けて歩きだす。

「だ、誰よあんた！」

男は足を止めず、彼女を見向きもせずと言う。

「生徒会の敵……かな」

彼女は男の背から手紙に目線を移す。

その手紙には彼女が持っていた手紙と全く同じ内容だった。

「……なんなのよ、あいつ」

彼女は呟きながらも手紙をロッカーに入れて、部屋を出た。

――
昼休みになり、殆ど人が来ていない教室で1人淋しく自分で作ってきた弁当を食べようと鞆から弁当箱を取り出す。

……たまには誰かと食べたいな

この学園に入ってから余り人と一緒に何かを食べなくなった気がする。

……と言っても、中学の時は『彼女』が俺と一緒に居てくれたか

らかな。

それこそ、今となっては思いたくもないことだけど。

軽くため息を吐く。

すると、教室のドアが勢いよく開いた。

「探したぞ、駿河」

そう言うときめだかちゃんは一瞬で俺の傍に来た。

「さあ、行くぞ」

「……えっ？ 何処に？」

何も聞いてないんだけど……

「なに、来ればわかるさ」

めだかちゃんはそういうと俺の返事も聞かずに手を取って歩きだす。

……理不尽だ

そんなことを思いながら俺はめだかちゃんに着いていった。

めだかちゃんに着いていった結果、ついた場所は生徒会室だ。

めだかちゃんは席に座ると隣の席を軽く叩きながら扉の前で戸惑っている俺に言う。

「どうしたのだ駿河、早く私の隣に座れ」

俺は言われるがままにめだかちゃんの隣に座る。

「……たしかに生徒会補佐の時間は昼休みも含まれてるけどさ、仕事なら仕事って言うてくれよ」

ため息混じりに言うめだかちゃんは首を傾げながら言う。

「私は貴様と一緒に昼食を取ろうとしたただけだぞ？」

……えっ？

「教室にしてもよかったのだが、それでは他の奴らが邪魔だからな
「生徒会室ならば2人で過ごすことも可能だろうと思ひ、来たのだ
「なに、善吉には昼の仕事は無いと伝えているから邪魔しにくる
ことはないだろう

「ここのなら、私と駿河の2人っきりだ」

それだけ言うめだかちゃんは俺の前に俺の弁当箱を置く。

机の上に置きっぱなしかと思っていたんだが、どうやら持ってきて

てくれたらしい。

……都合がいいと言うか、俺が誰かと食べたいと思ったことを『知ってた』んじゃないのか？

そんなことを思いながら弁当箱を開ける。

まあ、俺としてもこの話は嬉しいけど。

めだかちゃんも自分の弁当箱を取り出しとそれを開ける。

「へー、意外だ」

「意外？ 何がだ」

めだかちゃんの弁当箱を見ながら言う。

「いや、重箱とかじゃないんだ」

めだかちゃんの家は金持ちだ。

金持ちの弁当箱と言えば重箱だ（ドラマではだけど）それなのに、めだかちゃんを取り出したのは普通の弁当箱だ。

「普通の日には重箱など使うはずがないだろ」

呆れながらめだかちゃんは言う。

まあ、それもそうか

「駿河が重箱で食べたいと言うのなら作ってきてやってもいいぞ？」

「いや、遠慮しとく……つうか、めだちゃん自分で作ってるの？」

めだかちゃんの口振りからしてそうなんだろう。

これはまた意外だ。

めだかちゃんクラスの人にもなると使用人がいて、その人達が作ってくれると思ってた。

「少し前まではそうだったんだがな、駿河に美味しいと言わせれるような料理を自分の手で作るために日々練習中だ」

……何で俺なんだよ。

そりゃまあ、俺のことを思ってくれているのは嬉しいけど……俺じゃなくて善吉君にしてあげればいいのに。

「まあ、料理に関しては駿河の足下にも及ばないが世の中には主夫と呼ばれる人々もいるのだ

「私が料理を上手く作れなくても、駿河がやってくれれば構わない

「駿河を養うのは私としても苦ではないからな

「そのかわり、駿河は家から一步も出さないけどな」

恐っ！

何か結婚する前提みたいな話をされてるよ！

確かに一生養われるんだったたら喜んでだけど家から一步も出ちゃいけないんだったらノーサンキューだよ!!

「……悪くないな」

「何が!？」 俺が軽く監禁されるかもしれない未来なんだよ!」

そんな未来は未来永劫来てほしくない。

「……そうか」

「駿河が嫌がるなら当面の間は止めておこう」

残念そうに言うめだかちゃん。

……本気だったのかよ。

そんなことを思いながら昼飯を食べおわる。

ちよつとめだかちゃんも食べ終わったみたいだ。

「さて、駿河よ」

「これを読んでくれないか？」

弁当箱を片付けているとめだかちゃんに一通の手紙を渡される。

「……これは」

「先程目安箱を確認していたら入っていたのでな、貴様にはこれを投書した人物を放課後ここに連れてきてほしい」

「ちゃんと記名もあるし……わかったよ

「彼女と一緒に来ればいいんだろ」

俺が言うとめだかちゃんは立ち上がり満足そうに首を縦に振る。

「くれぐれも私以外の女に現つを抜かすなよ」

……めだかちゃんに現つを抜かしたことも無いけどね

俺もめだかちゃんに合わせて立ち上がると生徒会室を出た。

———今回の依頼は何なんだろうな———

そんなことを考えながら、ゆっくりと教室に向かった。

学園編〜第3箱〜（後書き）

こんにちはー勦bでーす

今回はまあ、1話と2話の間の話ですね。

……書きたかったな、2話

何でオリジナルの話になったんだろうか自分でも謎です。

PS次回は短めでいく予定です

学園編〜第4箱〜（前書き）

前回の後書きで短くなるト書きました。

あれは嘘です。

……だらだらと長くしてしまいました。

学園編 第4箱

放課後直ぐに俺は彼女に会いに行く。

「有明さんはいるかな？」

二年九組の扉付近にいた生徒に聞く。

「有明さんは……いたいた、おーい！ 有明さーん!!」

生徒が言うと彼女が近づいてくる。

「君が有明さんかな」

「えーと……」

いきなり知らない人に呼ばれて戸惑っている彼女を安心させるために俺は言う。

「生徒会関係の人だよ」

それだけ言うと有明さんの手を取る。

「悪いけど、今から生徒会室にまで来てもらうよ」

「えっ？ えっ!？」

場の状況が把握できてない女性を無理やり生徒会室に連れていく

男がいた。

つうか、俺だった。

――――

「それじゃあ、俺がまず生徒会室に入ってめだかちゃん――生徒会長と話をするから、少し待ってて」

有明さんを生徒会室前にて待たせ時ながら俺は生徒会室に入った。

「むっ、遅かったな駿河

「依頼者は何処にいるのだ」

「部屋の前にいるよ」

入って直ぐに聞いてくるめだかちゃんに応えろ俺は善吉君を見る。

善吉君は黒い制服な下にジャージを着ており

「デッデビルかけえ!!」

と、騒いでいる。

……相変わらず色々とセンスが残念だ。

「……何やってるの善吉君」

苦笑いを浮かべながら善吉君に声を掛ける。

「反骨精神のカタマリみてーだ！」

駄目だ、聞いてない。

諦めながらため息を吐く。

善吉君は『庶務』の腕章をしており、めだかちゃんがしている腕章にはそれが消えている。

約1週間前にあった剣道場での事件を切っ掛けに善吉君は生徒会に入ったのだ。

「有明さんと呼ぶのは、善吉君が落ち着いた後でいいよね」

「そうしてくれ」

俺とめだかちゃんは善吉君のテンションが下がるのを待つことにした。

……有明さんにはいい迷惑だろうな。

後で謝罪しておこう。

あれから数分後、善吉君のテンションが元に戻ったため有明さんを生徒会室に招き入れ、今回の相談を聞いた。

有明さんは偉そうな態度のまま話を聞くめだかちゃんと変な（本人曰くデビルかけえ）服装をしている善吉君を交互に見ては不安そうな顔をしている。

「それじゃあ、有明さん例のモノを見してくれるかな」

「相談っていうのはこのことなんだけど……」

有明さんはカバンの中から一枚の手紙と一足のスパイクを取り出す。

「……………酷いな」

手紙を片手にスパイクを取るとめだかちゃんが呟く。

「有明さんは今度ある大会で短距離走の代表に選ばれたんだよね」

「うん、二年生で代表に選ばれるなんて滅多にないことだから凄く嬉しかったんだけど」

嬉しかった

そう過去形ではっきりと有明さんは言った。

俺はめだかちゃんの後ろから手紙を見る。

『リ』『ク』『ジ』『よ』『う』『部』『や』『め』『ロ』

一文字一文字が新聞の切り取りをはりつけつてある。

「随分長い間愛用していた靴のようだがこんなかとをされては練習がきんのではないか？」

スパイクをじっくりと眺めながらめだかちゃんは言う。

「……今はスニーカーで代用してるわ」

俯きながら有明さんは応えた。

「顧問の先制には話せないだろうね

「問題を抱えている生徒なんかレギュラーから外されるだろうし
「犯人はそれが狙いなんだから」

……本人に胸くそ悪い話だ。

俺は俯いている有明さんに近づく。

目元に涙を貯めている有明さんの頭を右手で軽く撫でる。

「そんな犯人と一緒に練習なんかしたくないだろうね

「みんながみんな等しく怪しく見えて誰も信じれないだろうね」
有明さんが安心するように優しく言う。

「でも、安心するといいよ

「この相談は彼女が解決してくれる――」

俺は彼女を見る。

彼女――めだかちゃんは閉じた扇子を有明さんに向けながら堂々と言う。

「駿河の言うとおりだ

「この黒神めだかが今日中に犯人を突き止めてやる!!」

「今日中!?!」

めだかちゃんの宣言に善吉君が驚きの声を上げる。

……俺も今日中には驚いたけど。

――

有明さんを帰すと善吉君が文句を言いだす。

「今日中とかまた大言壮語しやがって」

善吉君はボロボロのスパイクを手に取り、切り傷をみる。

「この程度の材料じゃ犯人の特定なんてまずムリだぜ?」

「そうでもないよ」

善吉君からスパイクを取り上げる。

彼は俺を睨むように見てくるがそんな善吉君を無視して話を続ける。

「まず犯人は陸上部の女子の誰かというのは善吉君でもわかるよね」

スパイクの切り傷を指差して俺は言う。

「実は、このスパイクにも大きなヒントがあるんだ」

「ヒント？」

善吉君は睨むのをやめて俺からスパイクを奪い返すとそれを凝視する。

「駿河、少し来い」

そんな善吉君をほっというめだかちゃんは俺を手招きしながら名前を呼んだ。

そんなめだかちゃんに近づく。

「駿河、私は貴様の優しいところが大好きだ」

考え込んでいる善吉君に気を遣っているのか小声で言う。

「だがな、貴様は私以外に優しすぎないか？」

「厳しくしろとは言わないが、今回のことは流石に無視するわけ

にはいかん」

めだかちゃんは俺の右手を掴む。

———強く掴む

「貴様には後で話がある

「いや、話というよりもお願いだな

「——聞いてくれるよな」

「……聞くよ」

生徒会補佐である俺は生徒会長には逆らえない身の上だしね。

めだかちゃんは満足そうな笑みを浮かべると俺の手を離す。

「さて、善吉よ駿河から貰ったわかりやすいヒントで謎が解けたか？」

めだかちゃんは善吉君に近づいてスパイクを取り上げる。

「……その顔を見るかぎりわからないようだね」

「うるせー！」

ため息混じりに俺が言うと言善吉君は逆ギレしだした。

怖い怖い。

「この靴はハサミで切り裂かれておる」

めだかちゃんが善吉君のために答えを教えだす。

「靴をハサミで切るといのは実は結構な重労働だな」

「善吉君でも何も考えずにただやみくもに靴をここまで切り刻むのは大変だろうね」

舐めて言う俺を善吉君が睨むが直ぐに首を傾げて右手を自分の顎に置く。

「でもよ、犯人は女子なんだろう？」

「自慢じゃねえが俺だって鍛えてるんだから、そんな俺でも大変な作業を女子がやるのか？」

善吉君の言葉に俺とめだかちゃんは同時にため息を吐く。

「善吉よ、それは『何も考えずに』行った場合のみだ」

めだかちゃんの言葉に更に善吉君は難しい顔をしだす。

「ほら、ここをよくみて」

めだかちゃんからスパイクを受け取ると俺は注目してほしい箇所を指差す。

「よく見ると分かるだろ」

「的確に縫い目に刃を入れているんだ、的確すぎるくらいにね」

「これほどまでの的確にやれるのは同じ種類のスパイクを愛用して熟知してる人ぐらいだ」

善吉君はポカーンとした表情で話を聞く。

「これを裏付ける証拠としてはこれだね

「ここまで切り刻まれているのにメーカーのロゴには傷一つないんだ

「まあ、犯人はこのスパイクに愛着でもあるんだらうね」

善吉君は表情を変えずただただ聞くだけだ。

スパイクをめだかちゃんに返すと、彼女は俺の頭に手を置きだした。

「ッ!!」

俺と善吉君が驚いているのを無視してめだかちゃんはそのまま頭を撫でます。

「流石は駿河だな

「私が言おうとしたことを言ってくれるとは――

「だが、まだ甘いな」

めだかちゃんの手を払うと俺は言う。

「ハサミのこと？」

「そうだ」

めだかちゃんは俺が払った手を見ながら、少し悲しそうな顔で言う。

「このスパイクは左利き用のハサミが使われておる」

「……何でわかんだよ」

善吉君は俺をまた睨みながら言う。

「ハサミの切り口でわかるものだよ」

からかうように俺が応えろとめだかちゃんが手紙を差し出す。

「駿河よ、貴様に頼みたいことがある」

……手紙か

この手紙に関しては俺はよくわからない。

「この手紙に使われている新聞を調べて来てほしい」

「私はこのような記事を使った新聞を見たことが無いからな」

めだかちゃんから手紙を受け取る。

「まあ、知り合いに伝えてくれそうな人がいるからその人に頼んでみるよ」

俺はそのまま生徒会室から出ていった。

めだかちゃんから手紙を借りて俺はある場所に向かった。

「矢文さんはいるかな？」

図書室に入ってまず俺は委員の人に聞いた。

「いつもの部屋にいますよ」

そういつて指差したのは奥にある扉だ。

「ありがとう」

俺はそのまま扉に近づき開ける。

部屋には幾つもの巨大な本棚があり、その中心には椅子に座りながら本を読む彼女がいた。

「君がおねーさんにあいにくるのは久々じゃないかな」

彼女——矢文さんは本から目を離して俺を見る。

「今日はお願いがあってね」

矢文さんに手紙を渡す。

「この手紙につかわれている新聞について教えてほしいんだ」

矢文さんは手紙の裏を見る。

「つまり、『ウラ』にある記事を参考にして教えろということかい？」

流石は矢文さんだ、察しがいい。

「断るよ」

えっ？

「手紙を受け取るときに君から女の匂いがしたんだけど……」

「何で私以外の女と仲良くしてるんだい？」

……匂い？

そういえば、有明さんの頭を撫でたな。

めだかちゃんも相談が終わったらそのことで話があるって言うてたっけ。

「……まあ、君からのお願いを断るわけにはいかないかな」

それだけ言うとな矢文さんは手紙を俺に返し、白紙の紙にスラスラと新聞会社、年月、配られた地区、印刷した時間帯をメモした。

矢文さんはそのメモを俺の前に差し出す。

「今度デートに連れていってくれと約束するならこのメモを渡そう」

「いや、そのメモはいらない」

俺は矢文さんに背を向けて歩きだす。

「そのメモの内容は『知った』よ」

……『彼女』に力を弱くされてから不便になったな。

「……残念だよ」

冗談か本気かわからないような口調で矢文さんは言った。

そんな矢文さんの言葉を聞きながら俺は部屋から出た。

めだかちゃんからメールで送られて来た集合場所に俺は来た。

「はい、これが手紙に使われていた新聞の情報だよ」

先程メモしといた紙をめだかちゃんに渡した。

「うむ、ご苦労だったな

「撫でてやろう」

「いらないよ」

そんなことをめだかちゃんと話ながら俺たちは1人の女子を見る。

「彼女が犯人なの？」

「断定は出来ないが、ここまでのめだかちゃんの推理があったたらそうだ」

善吉君は彼女を見ながら応える。

「それにしてもドンマイでしたね先輩

「わざわざ意味のない手紙を調べるために働いたなんて」

そんなこてをはじめてあう女性に言われた。

「おい！ 不知火少し黙れ！！」

そんな俺を氣遣ってくれたのか善吉君は不知火と呼んだ女性に言う。

「うむ、さっぱりわからん」

後ろにいためだかちゃんが俺が書いたメモをポケットにしまいながら言う。

……わかるはずがない

手紙に使われていた新聞は全て県外のものだった。

しかも統一性の全くないような……

「で、どうすんだよめだかちゃん」

「本人に直接聞くわけにもいかないしね」

まあ、そう言っても意味ないんだろうけどね。

「諫早三年生　貴様が犯人か？」

既に犯人候補であった彼女の後ろにいたためだかちゃんが言う。

「!!」

「いや　このスパイクの件なのだが……」

驚きながら後ろを振り向く犯人候補

スパイクを見ながら話すめだかちゃん

驚いたのか何故か背中から倒れた善吉君

腹を抱えて地面に横になりながら爆笑する不知火さん

そんな皆に背を向けて俺は1人で歩きだす。

——次はもっと面白い相談がいいな

そんなことを考えながら——

――
一足先に帰ろうとしたのだが、めだかちゃんからメールで生徒会室にいろと言われたため大人しく生徒会室で待つことにした。

……生徒会補佐も大変だ。

「待たせたな」

……本当だよ。

生徒会室で待つこと約30分、やっとめだかちゃんが来た。

「犯人は違ったよ、やはりあの手紙が最大のヒントなのかもしれないな」

ため息を吐きながらめだかちゃんは俺の前に椅子を持ってきて座る。

「さあ、失敗した私を慰めるといい」

……はあ？

「……………」

めだかちゃんは俯いたまま黙って俺の様子を伺う。

……もしかして。

俺はめだかちゃんの頭をゆっくり撫でる。

「……ッ！」

「これでいい？」

めだかちゃんは驚いた表情をすると顔を上げて俺を見る。

「やっぱり駿河は私のよき理解者だな

「私のやってほしいことをやってくれて

「私のことを考えていてくれる

「——私も駿河の一番の理解者になりたいな

「……駿河」

愛しそうにめだかちゃんは俺の名前を呼ぶ。

「——無理だよ

めだかちゃんじゃ俺の一番の理解者にはなれない。

「——『彼女』がいるかぎり

でも、今はめだかちゃんが俺の一番の理解者なのかもしれない。

『彼女』はもういないから。

俺は撫でるのをやめて立ち上がる。

不満そうに此方を見てくるめだかちゃんに手を差し出す。

「下校時間はもうすぐ過ぎるから帰ろうか」

「――ああ」

めだかちゃんは俺の手を取るとそのまま握る。

――今日の『彼女』は不機嫌かもな

そんなことを考えながら歩きだした。

目の前の彼女を見ながら。

学園編〜第4箱〜（後書き）

こんにちはー勦bでーす

図書委員長登場に何人の人が驚いたかな？

前々から出そうと思っていたため早めに出せてよかったです。

次に出したいのは赤さんこて赤　青黄ですね。

赤さんはヤンデレが似合うはずだから！！

PS総合評価480達成したしそろそろ番外編でもやろうかなと思ってます。

番外編無しの場合は次は安心院さんのターンです。

夢ゝ第5箱ゝ（前書き）

初めてかもしれないヤンデレ回です。

夢 第5箱

夢の中で目覚めると直ぐに違和感に気付いた。

何時もは席に座っているのに今は床に寝転がっているのだ。

起きようとしても体が言うことを聞いてくれない。

……なんなんだよ。

軽くため息を吐くと『彼女』の声が聞こえた。

「いきなりため息つつうのは失礼だとは思わないのかい」

『彼女』———あんしんいん安心院さんの声を聞いたら俺の首が動くようになった。

俺は机に座っている安心院さんに言う。

「なんで俺は寝転んでいるのか教えてくれませんか」

安心院さんは笑みを浮かべながら指をならす。

すると、俺の身体中に五寸釘が現れた。

「————ッ!？」

「なに、安心するといいよ（安心院さんだけにね）
「この五寸釘は幻だよ

「ただ、君の自由を封じているのを分かりやすくしたかったただだ」

……幻か

どうりで痛みが無いわけだ。

「それで、なんでこんな幻を見せてるんですか」

意味が分からない。

俺の自由を封じる意味が。

「同じことを何度も言わせないでくれよ

「まあ、君と話せる時間が増えるのは僕としても嬉しいことだからね

「君の質問に答えてあげよう」

それだけ言うとか安心院さんは俺を指差す。

「駿河に自由なんていらないだろ

「だから封じた」

……はあ。

「意味が分かりません」

俺が率直な感想を言うと安心院さんは口を開く。

「言葉どおりだよ

「駿河には自由なんていない

「駿河は何時も僕の言うとおりに動けばいいんだ

「――『昔の君みたいだね』」

ッ！！

俺は安心院さんを睨み付けると、彼女は両手を上げてやれやれと
いった感じで言う。

「そう睨まないでくれよ

「僕は駿河の笑顔が好きなんだぜ

「つか駿河の表情は全部好きだ

「それはもう顔を剥がして部屋に飾りたいぐらいにね

「まあ、君に睨まれても僕は君からの愛情しか感じないって事だよ」

……愛情なんか無い。

それに顔を剥がすって……

剥がされたら俺は死ぬぞ。

安心院さんは机から立ち上がるとゆっくりと近づいてくる。

「駿河、君は知ってるとは思うけど僕は恋愛小説が嫌いだ

「実際に恋愛してみても余計嫌いになったよ

「どんな恋愛小説も大抵最後はハッピーエンドだ

「いや、ハッピーエンドが嫌いじゃないんだ

「ただ、ハッピーエンドになるまでの仮定が嫌いなんだ

「『お互いに離ればなれでも愛しあってる』、『他人から見たら不幸でも愛さえあれば幸せだ』、『今は自分を見てくれなくても最後はきつと両思いになる』とかだね

「どれもただのくだらない綺麗事だ

「現実にはあり得ない綺麗事

「そんな綺麗事が僕は嫌いだ

「だから僕は――

「『離ればなれになんかせせない』、『言うことを聞かないなら聞くようにさせる』、『僕のことを見ないなら僕以外の人間を見ないようにさせる』、『僕といて不幸と感じるなら僕以外の人といったらもっと不安と感じさせるようにする』」

安心院さんが俺の近くで止まるといつのまにか持っていた五寸釘を俺の胸に当てる。

「なあ、駿河

「最近君はめだかちゃんと仲が良すぎないかい？

「もしかしたら僕の思い違いかめしれないけど――

「僕がそう思うような行動を取った駿河が悪い

「『君は僕以外のクズと仲良くする必要がない』

「中学の時に言ったのを忘れたのかな

「めだかちゃんはまだしもあの女の頭をなんで撫でたりしたんだい

「頭を撫でるだなんて彼女である僕にすらやったことなかったじ

やないか

「それなのになんであんなクズの頭を撫でたんだい？」

安心院さんは五寸釘を胸に当てたまま言う。

「……別に今のあなたには関係ないですよ」

関係ない話だ。

元カノである安心院さんには――――

俺が言うとは身体中にあった五寸釘が消える。

まあ、身体は動かないけど。

全ての五寸釘が消えるとともに安心院さんは手に持った五寸釘を勢い良く俺の胸に打ち込む。

———ッ！！！！

言葉にできないような激痛が身体中を襲う。

「これはさっきのとは違って痛みを感じるようにしてあるよ

「この痛みで意識を手放さないようにしてあるから安心して痛みを受けるといい」

冷たく言い放つ安心院さん。

何か言いたいにも激痛のせいで上手く声が出ない。

そんな俺を見ながら安心院さんはまた五寸釘を何処からもなく取り出す。

今度は2本で各手に一本ずつだ。

「この両手にも痛みを与えないとね

「君はどちらの手でクズの頭を撫でたのかな

「まあ、どっちにしろ二度と僕以外のクズにやらないように両手にするけどね」

言い終わると同時に俺の両手の平に五寸釘が打たれた。

さらなる激痛が俺を襲う。

声を出して叫ぼうにも声が出ない。

ただただ激痛が身体中を走るのを俺は静かに黙って受け止めるしかなかった。

そんな俺の頬に安心院さんは手を添える。

「凄く痛そうだね駿河

「激痛に耐える君の顔も魅力的だよ

「ああ、駿河

「駿河駿河駿河駿河駿河駿河駿河駿河駿河駿河駿河

「やっぱり君だけは手放せない

「君の意思に関係なく僕は君の彼女だ

「なんせ、僕は君のことしか考えたくないぐらいまで君のことを愛してしまっただけだからね

「君だって悪いんだぜ

「僕をここまで病的に愛させるようなことをした駿河が

「僕は駿河に病みつきなんだ」

安心院さんは胸に深く刺さった五寸釘を取る。

「……な……んで」

五寸釘が取れて少しは喋れるようになった俺は言う。

なんで俺なんかを愛すのかを聞き出すために。

「なんでって何がだい」

安心院さんは俺に抱きつく。

「なん……俺が」

安心院さんは顔を近付けながら言う。

「ほら、早く言うんだ」

「駿河は僕に何を聞きたいんだい」

「駿河が聞きたいことは全部僕が応えてみせよう」

優しく言う『彼女』

そんな安心院さんを見てると心なしか安心する俺はまだ――――

「なんでおれをあいすんですか」

やっとの思いで言った俺を見ながら『彼女』は優しい笑みを浮かべる。

「駿河だからさ」

安心院さんは当たり前のように言う。

「僕は駿河のことを深く知ってしまったため駿河を愛するようになったんだ」

安心院さんは俺の首筋に顔を近付けながら言う。

「駿河、君の意志は関係ない」

「僕は君が好きなんだ」

「愛してるんだぜ

「だから、駿河には僕の傍にいてもらう

「だから、駿河には自由なんていらぬい」

安心院さんは俺の首筋を軽く噛む。

抵抗しようにも体が動かない。

数分後『彼女』が俺の首筋から離れる。

「さて、君にこれをやったのは『2度目』だね

「『一方的な血の契約』」

「この能力は前にも説明したしわかるよね」

……またか。

安心院さんが言うとおりにこれをされるのは2度目だ。

「……一方的な契約で契約者の行動を縛る能力でしたっけ」

思い出しながら俺が言うとおりに正解だったのか安心院さんは俺の頭を撫でます。

「駿河の言うとおりにだ

「この『一方的な血の契約』ワンサイドコントラクトを使って今回は『僕以外の人の頭を撫でることをできなくした』」

安心院さんは俺に顔を近付ける。

「もうすぐ君は起きてしまう」

少しだけ悲しそうに安心院さんは言う。

「……悲しいけど今日はさよならだ」

それだけ言うとき安心院さんは俺とキスする。

——動けない俺に

——一方的に

安心院さんは直ぐに離れると嬉しそうな笑みを浮かべている。

……相変わらず一方的な人だ。

俺は最後にこれだけは言っておこう。

「さよなら、安心院さん^{あんしんいん}」

冷たく俺が言うとき安心院さんは机に座っていつもどおりの表情で言う。

「安心院さんじゃないだろ

「駿河だけは愛しさと親しみを込めてなじみと言うんだ」

そんな彼女の言葉を最後に俺は目覚めた。

両手の平に傷がなければ胸にもない。

……当たり前だ。

あれは夢なんだから。

夢の世界でしか会えない『彼女』

俺のことを愛してくれて、かつては俺の彼女だった『彼女』

……よくわからない『彼女』

だが、これだけはわかる。

俺が『彼女』をなじみと呼ぶことはもう無いだろう。

———今の調子なら、もう無いよ

———あんしんいん
安心院さん

夢〱第5箱〱(後書き)

こんにちはー勦bでーす

一方的な血の契約は私が考えたオリジナル能力になります。

名前を考えるのって大変ですね。

さて、今回はヤンデレ回になります。

ヤンデレになってたかな？

PS感想くれたら嬉しいです！

学園編〜第6箱〜（前書き）

少しだけセリフの書き方を変えました。

学園編／第6箱／

「準備はどうだい？」

学園の屋上にて座り込んでいる男に話し掛ける少年がいた。

「もっと有志が欲しいな。」

あのバケモン女あいてにこれっぽっちじゃ全然足りねえ」

男はため息を吐きながら言う。

「まあ、力づくで彼女を相手にするんなら全然足りないね。」

鹿屋が思っているとおりさ」

それを聞き男——鹿屋は立ち上がる。

「今、俺はある奴を目につけてる」

「気になるな、誰だい？」

少年は言葉とは裏腹に全く感情が籠もってない。

「人吉善吉だ。」

お前がよく知ってる奴だろ」

鹿屋はそれを言うと言きだす。

「……彼なら止めておいたほうがいい。」

彼は彼女を裏切らない」

歩いていく鹿屋の背を見ながら少年は言う。

「そんなわけねえよ。」

あいつはバケモン女のパシリに使われてるんだぞ」

鹿屋の自信満々な発言にため息を吐きながら少年は言う。

「武器は何時もの人達に渡しといたから、勝手に使うといい」

少年は鹿屋とは反対方向に歩きだす。

「待て！」

そんな少年を鹿屋は止める。

「お前は何でバケモン女の敵をするんだ？」

鹿屋は足を止め少年の背を見ながら言う。

「簡単さ」

少年は足を止めず歩きながら言う。

「俺は『生徒会の敵』だからだよ」

当たり前のように言う少年に鹿屋は何も言わずに歩きだした。

「意味がわからない奴だ」

そう呟きながら。

――

現生徒会長であるめだかちゃんが設置した目安箱は生徒の間では『めだかボックス』と呼ばれ早くも好評のようだ。

さて、そんなめだかボックスに管理は生徒会庶務である善吉くんだ。

庶務は大変だねー

そして、昼休みにめだかちゃんからめだかボックスの様子を聞くのが最近の日課だ。

めだかちゃんはあの日以来昼休みは俺の教室に来て共に生徒会室で昼飯を取っている。

……『彼女』がこのことに関して何も言わないのが怖い。

「駿河よ。

これが今日貴様に手伝って貰いたいことだ」

今は昼食でめだかちゃんと共に生徒会室にいる。

めだかちゃんが俺の前に一枚の紙を置く。

「これはまた、少し変わった内容だね」

紙を取り俺は言う。

「うむ、本来なら私がやりたいのだが……」

「めだかちゃんには無理だろうね」

俺の一言でめだかちゃんが少し俯く。

……にしても、これはなかなか面倒かもな。

紙を見ながらそんなことを思う。

……めだかちゃんが駄目だとすると善吉くんとやるのかな？

「駿河」

めだかちゃんが短く俺の名前を呼ぶ。

「この件に関しては善吉にも任せている。

これを機に善吉と仲良くするんだな」

めだかちゃんは扇子で口元を隠しながら言う。

……やれやれ。

「わかったよ、めだかちゃん」

それだけ言って俺は立ち上がる。

———善吉くんが俺と仲良くしてくれるかどうかなんて『知らない』

……知りたくも無いけどね。

生徒会室を出ながら今日の放課後が気まずいことにならないことを願った。

放課後、昼休みにめだちゃんから貰った紙を見ながら善吉くんを待つ。

『探してください』

紙にはそう大きく書かれており真ん中には犬の絵が書かれている。

……俺は犬よりも猫のほうが好きなんだけどな。

ため息を吐くと同時に後ろから声がした。

「駿河先輩！」

俺が声がした方を向くとそこには善吉くんと不知火さんがいた。

「3人もいたら子犬一匹捕まえるなんて余裕だな!!」

善吉くんが張り切りながら言う。

……今日はまた一段とテンションが高いな。

何かいいことでもあったのかい？

「それじゃ、早速探そ——」

「「？」」

急に黙った俺を2人が首を傾げながら見てくる。

……やばいな、『知っちゃった』よ。

「ごめん善吉くん！今日はバイトの面接があるんだった!!」

手を合わせて善吉くんに言う。

それを聞いた善吉くんは慌てだす。

「いきなりなんですか駿河先輩!？」

さんな善吉くんを置いて走りだす。

「ごめんね！また今度!!」

……本当にごめんね善吉くん。

もちろん俺はバイトの面接なんか予定にない。

ただ、このまま善吉くん達と一緒にいたら最悪な目に遭うことを『知った』んだからしかたがない。

だって『知っちゃった』んだもん。

……本当にごめん善吉くん。

俺はゆっくりと帰路に着いた。

――――

翌日、生徒会室にてボロボロの善吉くんの報告を聞く。

……帰ってよかった。

「つまり、善吉くんは不知火さんと犬を発見するも捕獲に失敗した上に逃走を許したんだ」

善吉の報告をわかりやすく纏めて言う。

「あれは犬じゃねえ、ワシントン条約で保護されてる狼だ!!」

善吉くんは思い出したのか震えながら言う。

「いや、狼ではなく犬だぞ善吉。

狼狩りのための狩猟犬なのだ。

生半な猛獣よりよほど獣性が高いぞ」

めだかちゃんが冷静に犬について説明する。

そして、その犬にはもう1つ厄介なことがある。

「そんな狂暴な犬が約半年間に成犬して、完全に野生化しちゃたみたいだね」

俺が付け加えるためだかちゃんがゆっくりと傾く。

……予想以上に厄介だな。

こんなことを後輩にやらせるわけにもいかないかな。

「ありがとう善吉くん。

ここから先は俺がやるから善吉くんはめだかちゃんを手伝ってあげて」

俺が言うのと善吉くんが驚きながら言う。

「なっ！ 駿河先輩でも1人じゃ無理だ!!」

「大丈夫だよ。

犬相手に遅れはとらないさ。

まあ、1人で無理なら無理で誰かに協力してもらおうしさ」

「誰かに協力？」

俺が言い終わると同時にめだかちゃんが立ち上がると俺に近づいてくる。

めだかちゃんが俺の前に立つと善吉くんに聞こえないぐらいの声で言う。

「貴様は誰に協力を頼むのだ？

無論、私だよな。

だが、万が一駿河が私以外の人に頭を下げるのだとしたら———許さないぞ。

私以外に頼るなんてな。

駿河が頼るのは私だけで充分だ。

違うか？」

俺の返事を聞かずにめだかちゃんは離れる。

「この件は私が動こう！」

急なめだかちゃんの発言に善吉くんは驚く。

……めだかちゃんが関わったら余計面倒になりそうなんだけど。

「つーかいのかよ・相手は動物だぜ？」

善吉くんの言うとおりだ。

めだかちゃんは動物にたいしてトラウマ（善吉くん談）がある。

……余計に面倒になりそうだ。

「構わんさ、私の方の案件は既にあらかたカタがついておるし」

めだかちゃんは扇子で俺を差す。

「何より！ 私の不甲斐なさが原因で駿河が私以外の人に頭を下げるなど我慢ならん！！」

「ッ！！」

それを聞き善吉くんは俯きながら両手を強く握る。

「ゆえに改めて！ 目安箱への投書に基づき生徒会を執行する！！」

めだかちゃんが高らかに宣言して数分後。

俺と善吉くんの前に犬の着ぐるみを着た人が現れた。

「誰だ！？」

俺の分も善吉くんが叫んでくれた。

「当然私だ！」

着ぐるみの口からめだかちゃんが顔を出しながら当然のように言う。

……何でめだかちゃんはこんなにも自信満々なんだろう。

「さて、あやつがターゲットか」

困惑している俺と善吉を置いて1人犬を見るめだかちゃん

「やっぱり止めたほうがいいよ、めだかちゃん。

これぐらいのこと俺と善吉くんで解決してみせるから」

「駿河先輩の言うとおりだ。

めだかちゃんが無理することじゃない」

俺達2人が言うためだかちゃんが嫌そうな顔で此方を見る。

俺が口を開こうとするとめだかちゃんは犬にむかって歩きだした。

「貴様達はそこで見ておるがよい！

私がいつまでも過去に囚われるような女でないことを証明してくれる！」

ムキになってめだかちゃんは犬にむかって歩く。

……やれやれ。

こういうところは可愛いんだけどな。

「さあ、怖くないぞ」

両手を広げてめだかちゃんは優しく言う。

「撫でてやろう。

ぎゅっとしてやろう。

一緒に遊んでやろう!」

めだかちゃんが一步犬に近づく。

「だからさあ!

私に貴様を触らせろ!!」

その一言で犬は全力で走りだした。

「えっ オッ俺!」?

善吉くんが自身を指差しながら驚くと犬は急カーブして隠れるように後ろに回った。

……えっ?

「なあ、善吉くん。俺にわかるように説明してくれないかい」

意味がわからない。

めだかちゃんが動物にトラウマがあるのは知ってたけど……

「簡単ですよ」

善吉くんは犬を優しく撫でながら言う。

「めだかちゃん動物を苦手なんじゃなくて」

俺はゆっくりとめだかちゃんを見る。

「動物がめだかちゃんを苦手なんですよ」

……えっ？

何それ怖い。

ま、まあ、犬は無事に捕まえたんだしよしとしようか。

未だに両手を広げているめだかちゃんから目を逸らしながら、俺はこの場を後にした。

「私を励ませ」

帰路に着こうとした俺だがめだかちゃんから生徒会室に来いというメールをもらったため大人しく生徒会室に来てすぐに俺は言われた。

「……いやだよ」

つか、着替えろよ。

何時まで着ぐるみ着てるんだよ。

俺が言うとめだかちゃんは涙目になりながら言う。

「駿河しか私を励ましてくれる奴はいないんだぞ。

前のように頭を撫でるだけでいいのだぞ。

ほら、撫でてくれ」

そういつて此方に頭を向けるめだかちゃん。

そんなめだかちゃんの頭を俺は撫でようとする。

―――が

動かない。

めだかちゃんの頭を撫でるという動作が出来ない。

……当たり前か。

『彼女』の能力で出来なくなったんだっけ。

俺はため息を吐くとめだかちゃんに頭を向ける。

「俺はめだかちゃんの頭を撫でることはできないけどさ、めだかちゃんが犬にやろうとしたことを少しだけなら俺にやってもいいよ」

……俺としても悪くない話だ。

めだかちゃんわ顔を上げると抱きついてくる。

「流石は駿河だ！」

私が一番したいことを察してくれるとはな。

ほら、嫌というほど撫でてやろう。

何処までも傍にいてぎゅっとしてやろう。

何時までも一緒に遊んでやろう。

何があろうと傍にいてやろう。

何時までも貴様の隣は私だ。

貴様は私だけ見ている！

駿河は私のことだけを考えてろ！

駿河は私のことだけを見つめている」

めだかちゃんはスラスラと言いながら俺の頭を撫でる。

無邪気な笑みを浮かべながら。

——何時までもこんな日常が続けばいいのにな。

そんなことを思いながらめだかちゃんを見る。

——あと何回俺はめだかちゃんの幸せそうな顔を見れるのかな

あと、何回しかないんだろう。

『知らない』

——知らないんだ

学園編く第6箱く（後書き）

こんにちはー勦bでーす

次回は安心院さんのターン！！

……早すぎるだろ。

私ですらそう思います。

ただ、前回以上のヤンデレではないので余り期待しないでください

P S 新連載として『病みつき学園』の投稿を決めました。

これは、めだかボックスのヒロイン達が皆ヤンデレだったら……

という話です。

簡単に言えば私が書いてる病みつき六課のめだかボックス版です

夢ゝ第7箱ゝ（前書き）

安心院さんのターンでもヤンデレではありません。

べ、別に書けないわけじゃ（ry

夢 第7箱

夢の中で目覚めるといつもどおりの席に座っていた。

「にゃー」

……にゃー？

起きてすぐに『彼女』の声が聞こえた。

俺は彼女の方を見る。

———そこには

「やあ、今日も会えて嬉しいよ」

『彼女』はいつもとおりの笑みを浮かべながら言う。

だが、大きな違和感がある。

「おいおい、そんなに僕の顔を見つめるなよ、照れるじゃないか」

顔を赤らめながら言う安心院さんの頭の上には———

「……何ですか、その猫耳」

黒色の猫耳があった。

俺はそれを指差しながら言う。

「つーか、何で猫耳？」

「駿河は猫が好きだろ。」

だから、猫耳を付けたら喜んでもらえると思ってね。
似合うかい？」

首を傾げながら言う安心院さん。

……素直に可愛いと思った。

「似合ってますよ。」

こんど『あいっ』の前で付けてあげたらどうですか？
きっと喜びますよ」

めだかちゃんに今度付けてもらおうかな？

猫好きな俺としては猫耳も好きだ。

まあ、猫には遠くかなわないけど。

「彼の前で付ける気はないさ。」

それに、彼は猫耳なんかじゃなくて裸エプロンを強要してきそうだしね。

僕の裸エプロンだなんて駿河に頼まれない限り誰にも見せることはないだろうね」

……裸エプロンって

相変わらずおかしいな趣味を持ってるんだな。

俺がそんなことを考えてると彼女は一瞬で目の前にある机に座った姿で現れる。

「なあ、駿河。

猫耳を付けた僕の言うことを少し聞いてくれないかい？」

安心院さんは俺の返事を待たずに言う。

「僕の今、一番したいことを予想してくれ」

また変なことを言うんだ。

「知りませんよ」

俺が冷たく言うとき安心院さんは俺の右側の頬に片手を当てながら言う。

「それは僕に興味を持ってないからかい？」

まあ、君の能力じゃ僕のことを知ることは不可能だしね。

興味が無いってわけじゃないんだろ。

ほら、ちゃんと考えてくれよ。

君の愛しの僕からお願いだ。

君は喜んで聞くべきだ。

つか、彼氏として当然だろ。

彼女のやりたいことの1つや2つ応えてみせろよ。

さあ駿河、言ってごらん。

僕が今、一番やりたいことを応えるだけだ」

……俺はあなたの彼氏じゃない。

そう言いたいのを我慢して俺は考える。

いきなり何故こんなことを聞かれたんだろう。

……へたに応えるわけにもいかない。

俺は考えを纏めると安心院さんの顔を見る。

俺しか捕らえていなさそうな瞳の彼女の顔を見る。

「外に出る……？」

これぐらいしかわからない。

詳しくは知らないが彼女は夢の中から出られないらしい。

本当か嘘かは知らないけど。

俺の応えを聞くと安心院さんはため息を吐き空いている片手を俺の顔の前に置く。

「はずれだよ」

冷たく俺を見下すように言う安心院さん。

「駿河、なんで君はわからないのかな。

僕がやりたいことなんて何時も君が関わることだけだ。

たしかに外にも出て君と久々にデートにでも出かけたいと思うけど、それは一番ではない。

別に何時かは出られるしね。

デートはその時の楽しみにとっておくよ。

僕が今、一番やりたいことは———」

安心院さんは空いた片手の平を俺に向ける。

「君を殺したい」

冷たく言い終わると同時に俺の首を片手で締める。

「ッ！」

俺が彼女の手を払おうとするが、両手は手錠されており、それぞ
れ椅子の足に捕まっていた。

「な……で」

なんでそんなことやりたいんだよ！

言いたいにも上手く喋れない。

だが、俺の言いたいことは彼女には伝わったらしい。

「理由は簡単だよ。」

君を殺したら、君は僕以外誰とも関われないだろ。

まあ、死んだ君に僕が関われるかどうかは試してみないとわから
ないけど、愛さえあれば可能だよな。

ジャンプだったら可能のはずだ。

それに、僕からしたら君と関われないより君が僕以外の女と関わ
るほうがずっと嫌なんだぜ。

君が僕以外の奴と関わってるって考えるだけで――――」

安心院さんはより強く俺の首を締める。

「君と関わった奴を殺したくなる。

でも、めだかちゃんを殺すわけにはいかないだろ。

だったら簡単、君を殺す。

そうすれば君は僕以外誰とも関われなくなるし、君に関わろうとする奴も消えるはずだ」

安心院さんは少しづつ力を抜く。

「おいおい、そんな顔をしないでくれよ。

君を殺したいけど、それはあくまでも最終手段だって。

それに、安心してくれよ（安心院さんだけに）君の周りの人を殺すのは『彼女』が最初で最後だ。

そう約束したろ」

「くっ！」

俺は安心院さんを睨み付けると言う。

「戦場ヶ原先輩のことか！？」

「おいおい、そう睨み付けないでくれよ。

そんな駿河も格好いいぜ」

「真面目に応えろ！！！」

「真面目も何もわかるだろ。

彼女は君の言うとおり戦場ヶ原だよ。
もう既に消えたね」

……黙れ

「『彼女』のことは誰も覚えてないさ。
友達も先生も部活の後輩も親族も……
皆『彼女』のことは忘れている。
僕と駿河しか覚えてないさ。
邪魔な『彼女』のことなんてね」

「黙れ!!」

戦場ヶ原先輩のことは俺は忘れない！

あなたの能力で消されても——

俺が忘れるわけにはいかない!!

「おいおい、君が言わせといて黙れつつうのは酷くないかい。
それに、もう『彼女』のことはいいじゃないか。
『もう死んだんだからさ』」

……そうさ

俺が殺したようなもんだ。

戦場ヶ原先輩を……
俺が……

「戦場ヶ原なんて早く忘れちまいなよ。

駿河には僕がいるだろ。

あの頃から彼女の僕が何時でも傍にね」

……あなたは俺の彼女じゃないだろ。

今のあなたは俺の彼女じゃない。

「……楽しい時間は過ぎるのが早いね。
もう君が起きる時間だ」

寂しそうに安心院さんは言う。

「駿河、『一方的な血の契約（ワンサイドコントラクト）で君に
契約したことは覚えてるよね」

……覚えてるよ

誰かを撫でられなくなるのはどうでもいい。

問題はもう1つの方だ。

「この能力は同じ相手に何度も使ったら相手が死んでしまうんだ。
この能力は相手に自分の血を少量入れて、その血が相手の行動を
防ぐんだ。

君の血は既に僕の血が混ざってる。

こう考えたら幸せな気分になるよ。

おっと、嫉妬しなくても大丈夫だよ。

この能力は駿河にしか使えないから。

まさに、駿河に対する僕の愛が作りだした能力と言っても過言で

はない。

話が少し逸れたね。

この能力は使いすぎたら相手——つまり、駿河が死んでしま
うんだ。

ワンサイドコントラクト

だから、『一方的な血の契約』はもう余り使わないようにするよ。
駿河を殺すならちゃんと事前に考えてある手順を使って殺すから
安心してくれ（安心院さんだけに）

ゆえに、能力は使わない。

これは彼女である僕のお願いだ」

安心院さんは黙ると俺に顔を近付ける。

彼女と俺の鼻が触れる少し手前で動きが止まる。

「一生僕の傍にいてくれよ。

そしたら、僕が君のことをぎゅっと抱き締めてやろう。

何時だって君の頭を撫でてやるさ、僕は君の傍にずっといるんだ
から。

未来永劫、君の隣は僕のものだ。

何があるうと、譲気は無い。

めだかちゃんにも

戦場ヶ原にも

——誰にも譲らない」

彼女はそれだけ言う俺を抱き締める。

片手で俺の頭を撫でながら。

耳元で囁く。

「本当はキスがしたいけど、『4度目』のキスは君からしてくれ

よ、駿河」

そう言って彼女は俺の額にキスをする。

———優しく囁いたその口で俺にキスをする

———戦場ヶ原先輩を殺した腕で俺を撫で

———俺を殺そうとした腕で俺を抱き締め

———満足そうな笑みを浮かべた彼女を見る

———かつての恋人の顔を見る

———

「……また夢か」

ゆっくり体を起こしながら呟く。

今も『彼女』は俺のことをみてるのかな。

そんなことを思いながら俺は自身の額を触る。

……4度目のキスなんかない

———
するはずがない

それぐらいわかるだろ

———
———
———
安心院さん

夢（第7箱）（後書き）

こんにちはー勦bでーす

駿河「羽川駿河だ。得意業は加速装置だ」

お前サイボーグだったの！？

駿河「そんなわけないよ」

ですよー

さて、今回はプレゼントがあります！

駿河「どれだい？」

『ケフィアさん』から頂いた『安眠枕』です！

駿河「これで安心院さんの夢を見なくなるのか……ありがたく本編で使うと……」

本編じゃ余りいいところが無いけどさ、この枕でも使って夢の中でぐらいいはゆっくりするといいよ。

??「カツ！　しょうがないから貰ってやるよ」

駿河「俺に渡さないの！？　つか、嫌々貰うなら俺にくれよ！」

PSめだかボックスのヤンデレメインになる『病みつき学園』を
投稿しました！！

これからの投稿は何でも知ってた少年↓病みつき学園↓何でも知
ってた少年

と、二週間おきになる予定です。

ですが、病みつき学園のネタが消えたり早めに書ける時間が出来
たりしたら変わります。

結局、不定期更新に変わりはない。

それと、そろそろ過去話を書こうと思っています。

次話はオリジナルの話を軽く入れる予定です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0147x/>

めだかボックス～何でも知ってた少年～

2011年11月18日08時51分発行